

瀬の浦における風景を活かしたまちづくりの実現へ向けて

その1 まちづくりにおける大学研究室の役割

瀬 歴史的 風景
保全 大学研究室 まちづくり

正会員○田中 大朗*1 同 今村 洋一*3
同 磯田 亜矢*2 同 川西 崇行*3
同 阿部 大輔*1 同 中島 直人*3
同 安藤 真理*1 同 宮本 裕太*1
同 池田 晃一*1

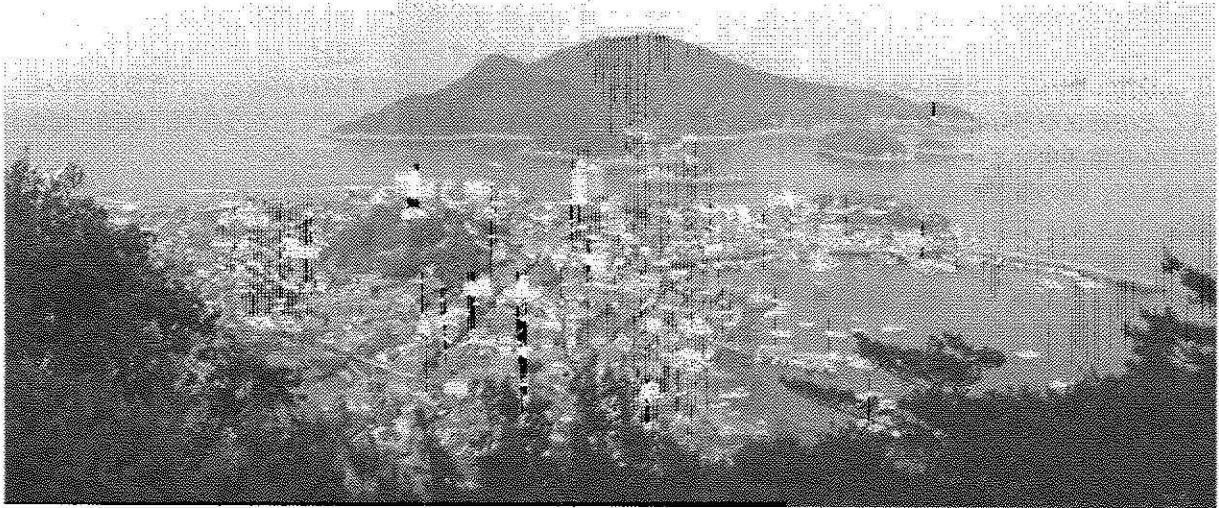


図1 瀬の風景（まちの西上方、権現堂より）

1. はじめに

近年、地方における依然として進まない公共事業の見直しを検討されているが、必ずしも住民の声と地域の文脈が汲み上げられる形で検討され見直しが進んでいるとは言えない。また、まちづくりにおいて住民やNPO、民間企業等が主体的に参加し、まちづくりに関わる主体が多様化しているが、それぞれの役割が明確でなくなり、その中で大学研究室の役割と立場はさらに曖昧な状況にある。

この一連の考察は広島県福山市瀬における大学研究室の取り組みとしてのまちづくりへの関わりについて考察するものである。本稿では、取り組み全体を概観し、一連の活動の整理を行う。なお、この考察は大学研究室有志 12名により行ってきた瀬の浦における調査・実践の成果をもとにしている。

2. 背景

1980年代半ばの高度経済成長の中、大規模開発によって危機感を募らせた大学の研究室により、デザインサーヴェイと呼ばれる調査が失われゆく歴史的町並みを記録する目的で緊急に行われた。雑誌などのジャーナリズムに取り上げられ、同時期に盛んとなる町並み保存・修景運動と同調するように興隆した。それは、大学研究室によるまちへの自主的な関わりであり、明確な調査手法を示していた。しかし、1970年前半にはデザインサー

ヴェイは衰退してしまう。その理由は、全国に残る歴史的町並みに対する調査を一通りやり尽くしたこと、そして、熱しやすく冷めやすいジャーナリズムとそれに乗りやすい建築界という相関関係が原因であった。その後、1975年には伝統的建造物群保存地区の制度が創設され、自治体も町並みの保存・保全に取り組み始め、多くの報告書がつけられた。しかし、その動きとともに、大学研究室としてのまちへの積極的な関わりにおいて、新しく明確な調査・提案の手法を見出せない状況にある。大学研究室の調査・提案は行政からの委託調査がその多くを占め、その役割は慣性化しているのではないか。また、ジャーナリズムのような一時期の流行に左右されないような調査・提案が必要なのではないか。大学研究室は現在の法定都市計画調査では把握しきれない細部に宿る課題と魅力を発見するという役割を果たすことが可能なのではないだろうか。

3. 瀬の浦の概況

広島県福山市の沼隈半島の先端に位置する瀬の浦は、人口 6 200人の地方小都市である(図1)。瀬は古くは万葉集にも詠まれ、室町幕府の日明貿易から港町として発展し、江戸時代には「風待ち」「潮待ち」のための寄港地として港湾施設が整備された。雁木・常夜灯・たて場・波止・船番所からなる江戸時代の港湾施設の面影を今によく伝える全国でも希有な町である。眼前の瀬戸内

海には仙酔島・弁天島をはじめ数々の美しい島々が浮かび、それら一体は「輛公園」として国の名勝に指定されている。輛はこのような大きな自然に抱かれた美しい風景を有している共に、嘗々と続いてきた人々の暮らしが息づく生活の風景を有し、それらの見事な調和の中にまちが成り立っているのである。

4. 取り組みの経緯と位置づけ

4. 1. 経緯

しかし現在、そのような輛の港を一部埋め立て、橋を架けることで道路を通し、観光客用の駐車場や施設と併せてホテルを整備するという公共事業が進行している。賛否を越えて、輛の住民が自分たちのまちを考え、議論する機会を持たないまま、その計画は進んでいる。

1983年、福山港地方港湾審議会において架橋埋め立て計画が決定されたが、その後、漁民や一部の住民の反対のため計画は実施されなかった。しかし、1996年から突如として計画が実施に向けて動き出した。

2000年3月、計画に疑問を抱き活動を始めていた住民の方が研究室に相談に来られた。住民が輛のまちのこれからを考える手助けをして欲しいということであった。その話を聞いた研究室の学生が興味を持ち、自発的に立ち上がり、あくまで有志として本活動は始まった。

輛にはこれまで、まちづくりに関しても、観光に関しても、その土地の文脈から丹念に汲み上げられた将来ビジョンはなく、直ちに住民を交えたワークショップなどを開けるような素地もなかった。また、いくつかの住民団体や大学の研究室が土木遺産として港湾施設調査を行うなど多くの主体がまちづくりに関わっているが、それらの主体を繋ぐ存在もない。そのような輛で、まずまちの文脈を読解する作業として計三度輛のまちにおいてフィールドワークを行い、その調査結果を「輛雑誌」^{※1)}という一冊の本にまとめた。

4. 2. 「輛雑誌」の編集・発行

今回のフィールドワークの調査成果として、発表時だけでなくいつでも手に取ることができること、また限られた人にしか届かない閉じた学術的なものではなく開かれたものとして、そして住民にとっては見聞き飽きた観光客向けのものではないことが重要であった。そのような点から本という形で成果をまとめた。情報技術の発展・普及に伴い、本は伝達のメディアとして、その役割が大きく変化してきているが、依然として本という形式はまちづくりにおいても重要な役割を果たしている。

4. 3. 地元での調査報告発表「T-HOUSE2000」

約半年間の調査・提案をまとめた成果を輛の住民に伝えようと現地において、成果をポスターにして「T-HOUSE 2000」^{※2)}と銘打ち、展示・発表した。地元の方の協力により幸運にも歴史的な町家の並ぶ一角の二軒

の町家をお借りすることができた。一軒は何年も空き家となっていた町家であり、もう一軒は、最近改装した町家で、住民の方が開いている喫茶店の二軒である。「T-HOUSE2000」はただ発表の場としてではなく、それ自体もメッセージとなることを意図していた。一つは一時的でも空き家を利用することで通りのにぎわいを再生していくこと、もう一つはまちのことを皆で考え・語ることができるオープンな場をつくり出すことである。

発表の後、その空き家は店舗として再生している。発表に際し、多くの人に見てもらうため、新聞・雑誌など各種メディアへ広報をした。

その後、2001年3月には地元住民団体主催のまちづくりシンポジウムに参加し、調査成果の報告を行った。

5. 一連の活動のまとめと考察

これまでの一連の活動で行ってきたことは、

- I) 自分の足でまちを歩く【3度のフィールドワーク】
 - II) 住民の方と直接会話【ヒアリング調査、「T-HOUSE2000」を開催、現地住民によるまちづくりシンポジウムにて発表】
 - III) 調査成果のまとめ、発表【「輛雑誌」を編集・作成・配布し、「T-HOUSE2000」にて発表、したこと】
- の3点である。これらの取り組みからの現時点での意義は以下の3点があげられる。

- I) 輛のまちづくりを考えるための土台づくり
- II) 住民の間でのまちづくりの議論を盛り上げる活動
- III) 住民の方がまちをより深く学ぶための教材

以上のような視点からまとめられた「輛雑誌」は、画一的な都市マスタープランでもなく、何も発展しない安易な面白本でもない。そこには、小さな風景や地域・まちの眼に映る現実から、まちづくりの方向性を導き出す志がある。

これまでの活動を通して重要であったのは、まず住民の声から始まったことである。また、学生の自発性、つまり上から与えられた仕事や作業・研究ではなく、自分たちに何ができるかを自分たちで考え、学生自ら行動することである。大学研究室はそのような細部からの都市計画あるいは都市デザインを築く可能性を有している。ここには、現在の大学研究室の役割として新しい可能性がある。このようなまちに対する自主的な大学研究室の取り組みは大きな潮流となりつつある。

注1) 「輛雑誌」は様々な志が集まっていること、これからも続いていく意味を込めている。その手法・内容については後稿参照。

注2) 「T-HOUSE2000」の「T」には、輛(TOMO)、東大(TODAI)、お茶(TEA)でも飲みながら、など様々なイメージを重ね、「HOUSE」には、各々の「家」に宿る人々の暮らしとまちへの思いからまちづくりが始まって欲しいという願いをこめている。

*1 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程 Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
*2 東京大学工学部都市工学科 助手 Associate Prof., Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
*3 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程 Graduate School, Dept. of Urban Engineering, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo